

三燕の金工品と倭の金工品

諫 早 直 人

1. はじめに

金や銀を用いた金工品が、日本列島に本格的に出土しはじめるのは古墳時代中期、およそ5世紀のことである。金工品の出現自体は、福岡県三雲南小路遺跡出土の金銅製四葉座飾金具や山口県稗田地蔵堂遺跡出土金銅製蓋弓帽など弥生時代中期にまで遡り、奈良県東大寺山古墳の金象嵌中平銘鉄刀や奈良県新山古墳から出土した金銅製晋式帯金具など古墳時代前期にも散見されるが、それらはいずれも中国からの舶載品と考えられている。それが古墳時代中期に入ると、出土量が急増し、その中には形態的特徴からみて舶載品とは考えがたいものが含まれるようになる。この時期に、単に製品の流入が活発化するだけでなく、金工品を製作する技術自体が大陸から移転されたことについては、衆目の一致するところであろう。しかし、それらの多くは大陸からも同じようなものが出土しており、古墳時代中期に本格的に出土しはじめる初期の金工品（以下、初期金工品と呼ぶ）のどこまでが舶載品で、どこからが国産品⁽¹⁾かの基準は、研究者によって異なる。一定数出土し、形態的特徴から多くの研究者が国産と考えるものは、眉庇付胃くらいではなかろうか。

いずれにせよ古墳時代中期に始まったとみられる初期金工品生産に携わったのは、その高度な専門性からみて、この時期に大陸から海を渡ってきた渡来工人であったとみられる。彼らの故郷、ひいては技術移転の経緯を考える上で、初期金工品の品目が、人体に装着する服飾品（武器・武具を含む）と、馬体に装着する装飾馬具にほぼ限定されることは、重要である。現在の考古資料にもとづく限り、このような品目が一定数出土している地域は、周辺では東北アジア、すなわち中国東北部から朝鮮半島にかけてのほかに見出すことができない。金工品というモノやそれをつくる技術だけでなく、それが担った社会的役割（最終的に墳墓に副葬することまで含む）の共通性を踏まえれば、これらの地域で展開した金工品生産が、日本列島における初期金工品生産に直接的な影響を与えた可能性は、高い。

遼寧省文物考古研究所を中心に長年にわたって進められてきた発掘調査・研究は、この服飾品と装飾馬具を基調とする金工品文化が、三燕（慕容鮮卑）で最初に花開いたことを明らかにしてきた（田立坤・李智1994、遼寧省文物考古研究所2001など）。その成果は奈良文化財研究所との共同研究などを通じて日本にも紹介され（奈良文化財研究所ほか2006、飛鳥資料館2009など）、日本列島から出土する初期金工品の一部を三燕製とみる意見も提起され

ている（董高1995、桃崎2004、藤井2014：115-124頁、土屋2015など）。

ただ、離れた地域から出土した資料の比較には様々な障害があり、とりわけそれぞれの地域で別個に構築された暦年代観は、彼我の直接の比較を困難なものとしている。そこで本稿では、まず両地域から出土した金工品を共通の時間軸で議論するための年代的枠組みについて筆者の考えを改めて提示する。その上で、三燕の金工品を分析する際の視点として、筆者がこれまでに日本と韓国で進めてきた金工品製作技術、中でも彫金技術に対する調査成果を紹介する。そして最後に、現在までに公表されている資料から両地域の金工品の相違点と共通点を浮き彫りにしてみたい。今後、両地域の金工品を本格的に比較していくための基盤を整えることが、本稿の主たる目的である。

2. 年代的枠組み

複数の国が屹立した東北アジア各地の考古資料を横断して分析する際に、常に障害となるのが彼我の年代観の不一致である。細かな暦年代観を一致させることは難しいとしても、各地域で組み立てられた相対編年を併行させる作業は、必要不可欠と考える。筆者は以前、4・5世紀の東北アジア出土馬具の広域編年網を構築し、三燕の紀年墓出土資料をもとに暦年代を付与したことがある（諫早2008）。馬具は東北アジアの広範な地域から一定数出土し、その中に技術的・機能的発達という方向性で形態変化を把握できるものが含まれていることから、共通の指標で編年することが可能である。筆者は三燕の馬具を2段階、倭

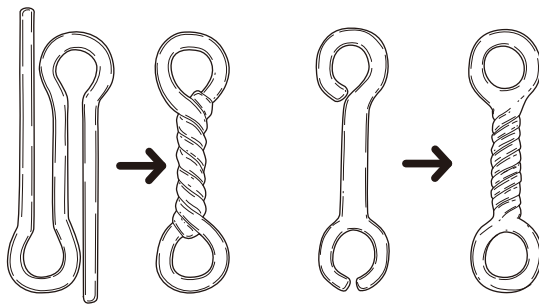


図1 3條振り技法（左）と1條振り技法（右）

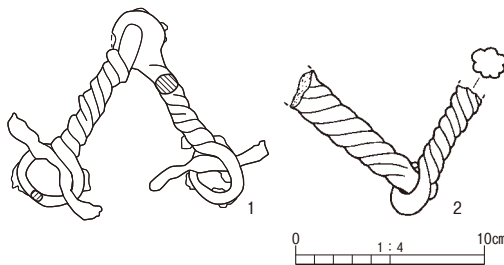


図2 三燕の轡（S=1/4）

1：喇嘛洞ⅡM101号墓 2：馮素弗墓

の初期馬具を3段階に分けたが、それらの併行関係の鍵となるのは轡と木心輪鏡である。

まず轡についてみると、銜の製作技法が、銜身を複数の鉄棒を振ってつくる2條振り技法ないし3條振り技法から、1本の鉄棒でつくる無振り技法ないし1條振り技法へ変化していくことが日朝両地域で明らかとなっている（諫早2005）。前二者は鍛接をせずとも環部を成形できるのに対し、後二者は環部をしっかりとつくるためには鍛接する必要がある（図1）。すなわち前二者から後二者へという変化は、基本的には鉄加工

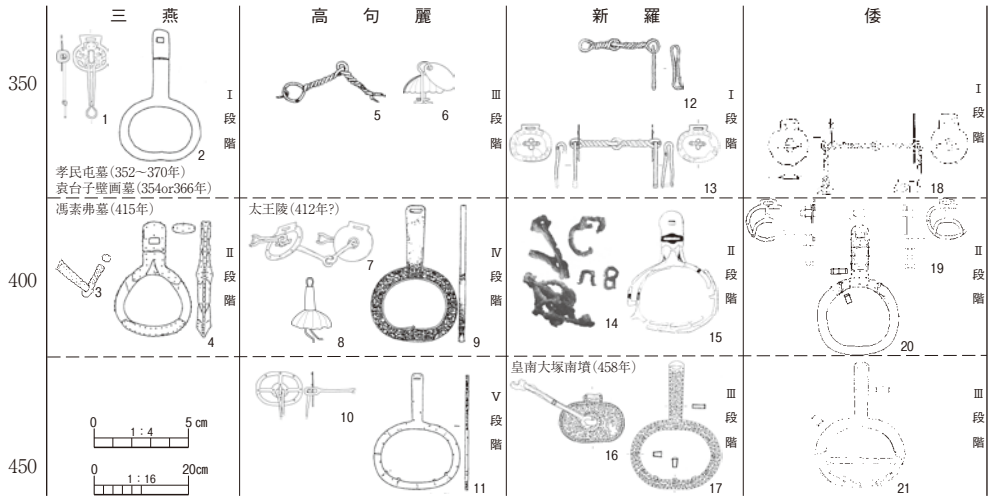


図3 東北アジア出土馬具の製作年代 (S=1/16、6・8は1/4)

1・2: 孝民屯154号墓 3・4: 馮素弗墓 5・6: 禹山下3319号墓 7: 七星山96号墓 8・9: 太王陵
 10・11: 万宝汀78号墓 12: 煌城路20号木槨墓 13: 月城路カ-13号墳 14・15: 皇南洞109-3・4号墳
 16・17: 皇南大塚南墳 18: 行者塚古墳 19・20: 七観古墳 21: 瑞王寺古墳

技術の向上という観点で理解することが可能である。

このような変化は中国北方全体で普遍的に確認できるわけではないが、北票喇嘛洞墳墓群など三燕（慕容鮮卑）墓から出土する轡が基本的に前二者の技法で作られていること（図2-1）、確実に北燕代に位置づけられる唯一の馬具出土墓である北票馮素弗墓（415年）から1條振り技法で作られたとみられる銜⁽²⁾が出土していることは（図2-2）、日朝両地域との併行関係を考える手がかりとなる。

次に木心輪鐙についてみる。日本や韓国では、5世紀の木心輪鐙は柄部の短いものから長いものへと変遷することが早くから指摘されてきたが（小野山1966、申敬澈1985など）、三燕（慕容鮮卑）や高句麗では4世紀代からすでに長柄が存在し、短柄は馮素弗墓出土例（図3-4）のみである。韓国には短柄の鐙と長柄の鐙について、時期差ではなく系統差と捉える意見もあり（李熙濬1995など）、少なくとも東北アジア全体で同じように柄部の長さが変化するわけではないことは確かである。それよりも筆者が編年の指標として注目したいのが、踏込部に滑り止めのために打ち込まれた踏込鉤（スパイク）の有無である。すなわち高句麗以東では、柄部の長短にかかわらず踏込鉤をもたないものともつものがあり、前者が先行して出現するのに対し、三燕（慕容鮮卑）では踏込鉤をもつものはまだ一例も確認されていない。

三燕馬具についての情報は依然断片的ではあるものの、これまでに公表された資料に関しては、日朝両地域の馬具に比べて、三燕（慕容鮮卑）の馬具が相対的に古い特徴を持っており、両地域の初期の馬具と対比される資料群であるということはいえそうである。こ

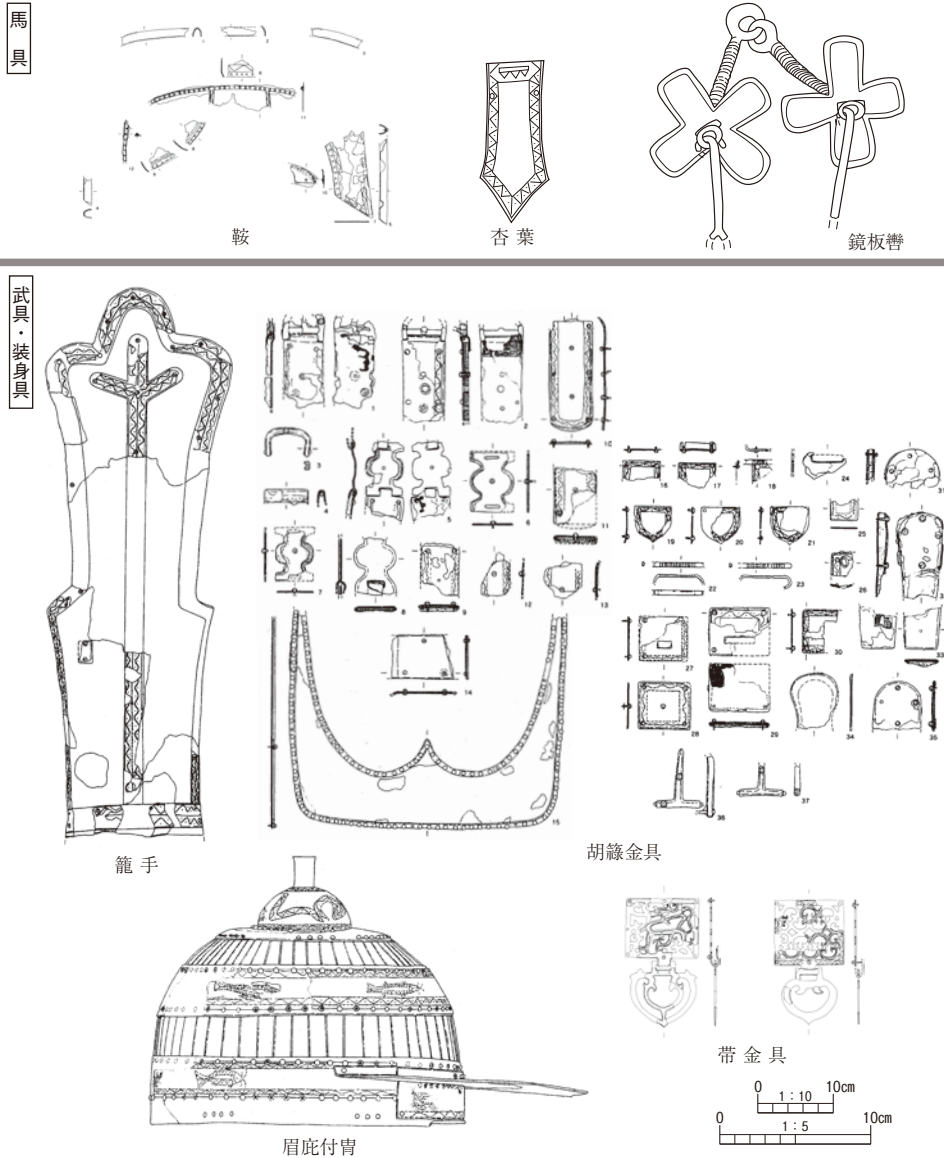


図4 月岡古墳出土品 (S=1/5、鞍はS=1/10、鏡板轡は縮尺不同)

のような広域で確認されるモノの変化、具体的には銜製作技法の違いや踏込鋲の有無などに基づいて設定した併行関係に、紀年墓出土資料によっておおよその暦年代を与えたものが図3である。

3. 倭の初期金工品生産

日本列島に金工品が本格的に出現するのは、馬具の出現に若干遅れる古墳時代中期中葉、上述の年代観にもとづけば5世紀前葉頃のことである。その品目に出現当初から日本列島

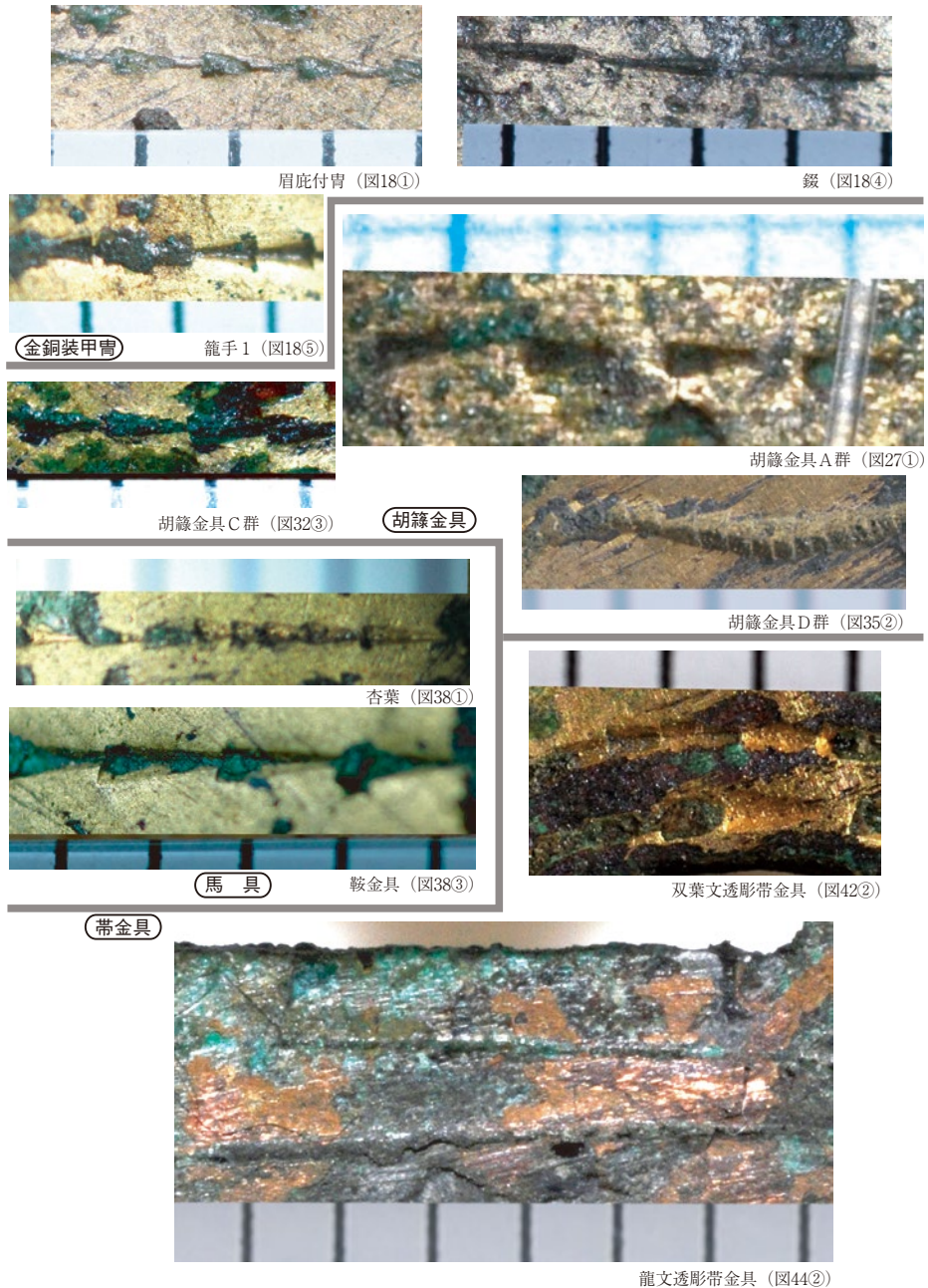


図5 月岡古墳出土品蹴り彫り一覧 (約12倍、() は報告書番号)

で製作されたと考えられる眉庇付胄 (図4左下) を含むことから、舶載品の本格的流入と、工人の渡来を前提とする国産開始時期は、ほぼ同時であったようである。筆者らは初期金工品生産の実態を明らかにするため、最近、眉庇付胄をはじめとする初期金工品の一括資料である福岡県月岡古墳出土品 (図4) (吉井町教育委員会2005) の彫金技術について詳細

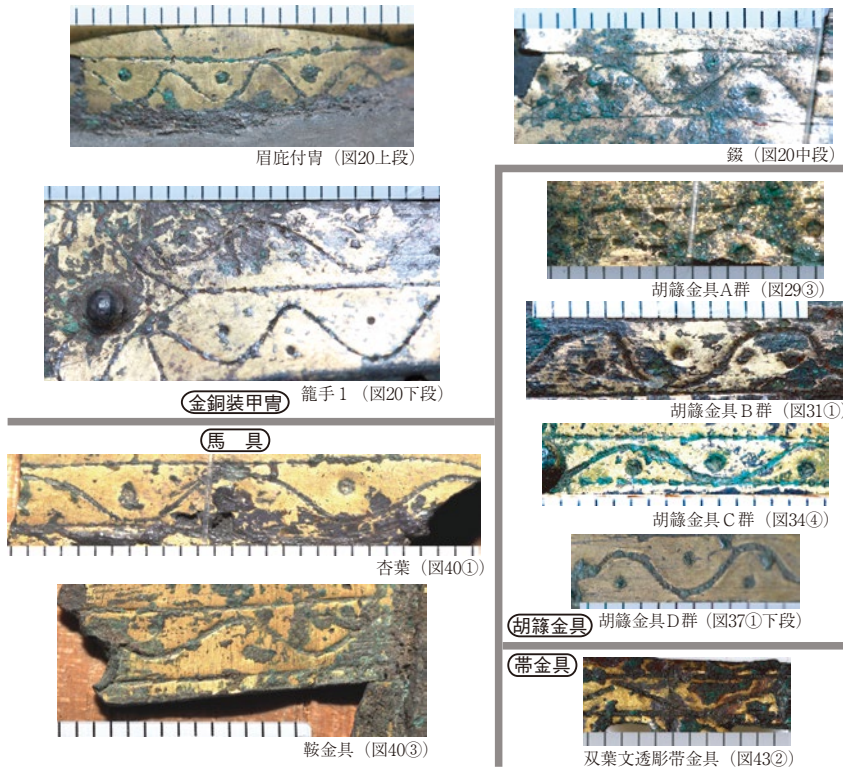


図6 月岡古墳出土品波状文一覧（約2倍、（ ）は報告書番号）

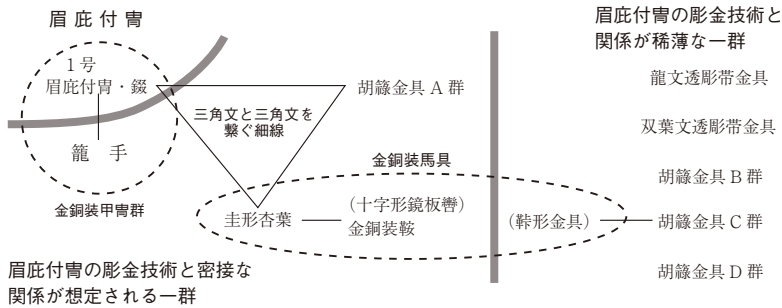


図7 月岡古墳出土金銅製品の生産体制

な調査をおこなったところ、各種金工品の彫金技術には精粗を含む「個性」があることがわかった（図5・6）（諫早・鈴木2015）。それらは、眉庇付胄を基準にすると「眉庇付胄の彫金技術と密接な関係が想定される一群」と、「眉庇付胄の彫金技術と関係が稀薄な一群」に大別できる（図7）。前者の間にも微細な差異はあり、一人の工人がそのすべてをつくったとは考えられないものの、眉庇付胄と近い製作環境で製作され、日本列島で製作された可能性が高いと判断される一群である。これに対し、後者は日本列島で製作されていないとは言いきれないものの、少なくとも前者とは異なる工房でつくられたと考えられる一群である。直接的な類例が新羅などからも出土していることをふまえれば、舶載品の

可能性も十分念頭に置く必要がある一群といえる。いずれにせよ古墳時代中期中葉に始まった初期金工品生産は、眉庇付冑のみをつくるような限定的な生産ではなく、生産規模はともかくとして、当初から多様な器物の生産をおこなっていた可能性が、極めて高い。

またここでは詳細な説明は省略するが、5世紀中葉頃の新羅王陵とみられる慶州皇南大塚南墳出土金工品などについても同様の分析をおこなったことがある（諫早2016）。皇南大塚南墳出土金工品も基本的には武器・武具を含む服飾品と装飾馬具からなり、両者の一部には同じ彫金技術が用いられている。倭と地理的にも近い新羅は、日本列島の初期金工品生産開始に直接的な影響を与えている可能性が高く、今後、上述の観点で両地域出土金工品を比較することで当該期に起こった技術移転の実態が明らかとなることが期待される。

4. 三燕の金工品と倭の金工品—相違点と共通点—

三燕の金工品については、まだ上述の分析と同一水準の観察をおこなえていないが、彫金の施された金工品の一括資料は多数あり、それらを分析することで三燕における金工品生産体制を復元することはもちろん、他地域と比較することも可能である。ここでは現状で公開されている情報にもとづき、三燕と倭の金工品の相違点と共通点について整理し、今後の課題を明確にしておきたい。

まず相違点についてである。4世紀代を中心とする三燕と5世紀代の倭、という地理的懸絶に加えて時間差もある両地域の金工品の間には、組成はもちろん、同一器種間の形態や文様、製作技術、様々なレベルにおいて相違点を見出すことができる。ここでは、日本列島における金工品生産の始まりを考える上で、特に看過できない違いを二つだけ指摘しておきたい。その一つは「波状列点文」という彫金文様であり、もう一つは「毛彫り」という彫金技術である。

前者は古墳時代の金工品の主要な文様パターンとして、5・6世紀代を通じて盛行する彫金文様である。初期金工品の蹴り彫りは、蹴り彫りたがねによって波状文と直線文を、点打ちたがねによって列点文を施文する（図8）。この波状列点文は、日本列島と新羅や加耶、百済など朝鮮半島南部で盛行するものの、中原には認められない「非漢的モチーフ」である（東1997：428）。高句麗ではまだ確認されておらず、三燕でも喇嘛洞墳墓群1988年採集品（田立坤・李智1994）に一例確認されるのみで盛行していた様子はいかかええないものの（図9-4）、類似した波状の周縁文様が散見され（図9-1～3）、東潮

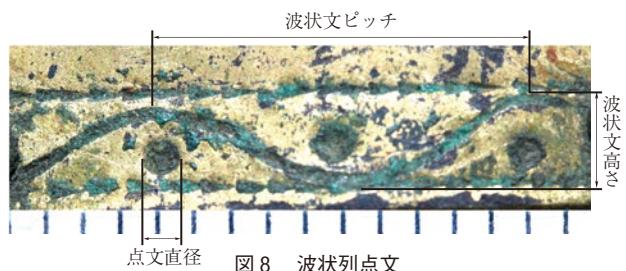


図8 波状列点文

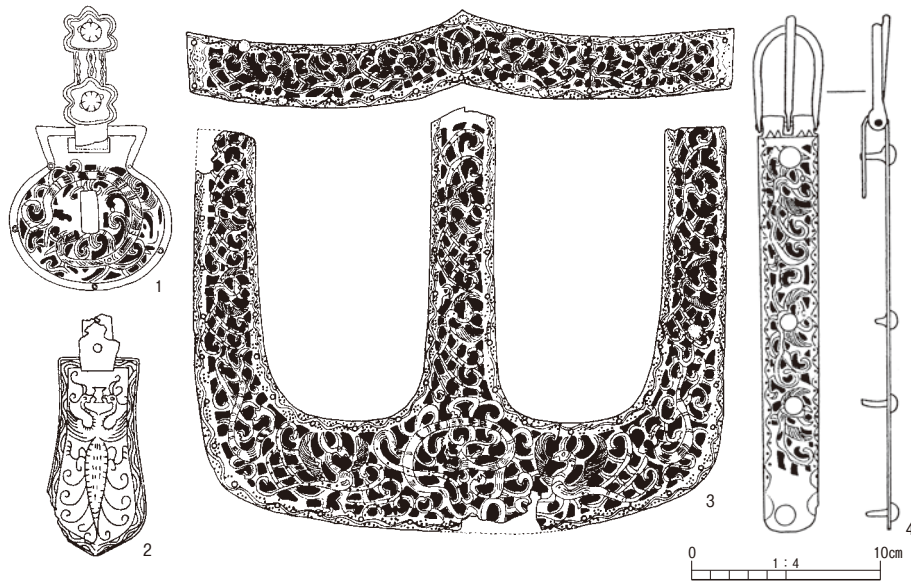


図9 三燕の波状列点文とその類例 (S=1/4)
 1：西溝村採集品 2：孝民屯154号墓 3・4：喇嘛洞墳墓群1988年採集品

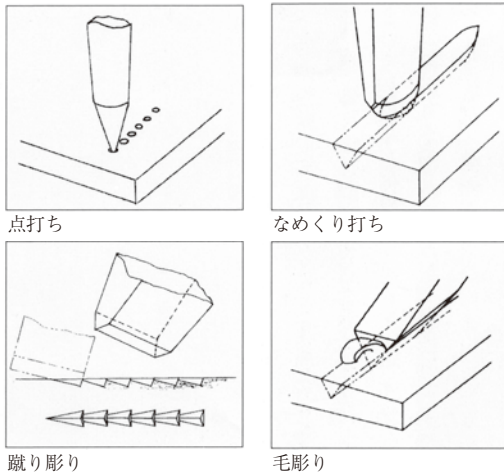


図10 線彫りの諸技法

である。日本列島の初期金工品の系譜を追究するにあたっては、これまで一部の金工品にみられる龍文表現などが注目されてきたが、今後はより広範な製品に施文されている波状列点文についても考慮する必要があることは確かであろう。

後者は日本列島では6世紀後半以降に普及する彫金技術である(鈴木2004)。過去には「蹴り彫り」と混同、あるいは一緒くたに扱われることもあったが、同じ線彫りでも「毛彫り」は素材を削り取る切削加工であり、素材を凹ませる塑性加工である「蹴り彫り」とは厳密に区別する必要がある(図10)。ただし、銹に覆われた遺物から実際にそれを峻別することは容易でない。

も指摘するように波状列点文へと至る型式組列を想定することも可能である⁽³⁾(東1997: 425頁)。

日本列島の龍文透彫帯金具を検討した藤井康隆は、波状列点文が製作技術や鉸具形状の異なる帯金具に横断して認められる文様であることから「時代・時期や製作地とは必ずしも直接関係しない」とみているが(藤井2015)、現状の分布をみる限り、東北アジアの金工品に特徴的な文様であることは、否定しがたい事実

たとえば晋式帯金具の彫金については、もっぱら蹴り彫りとみる所見もあるが（藤井2014：99頁）、奈良県新山古墳から出土した金銅製晋式帯金具（図版1～5）をみると⁽⁴⁾、鈴木勉がすでに指摘するように、鉸具や帯先金具、銚板の線彫りは蹴り彫りであるのに対し、銚板に伴う垂飾の線彫りは毛彫りである（図11）（鈴木2004：37頁）。本論からそれるため詳細な分析は別稿に譲るとして、今回改めて撮影をおこなった高精細の細部写真には新山古墳の晋式帯金具に用いられた蹴り彫りたがね、毛彫りたがね、円文たがねという3つの工具の痕跡がはっきりと写っている（図版5）。

話を再び三燕に戻そう。藤井康隆は三燕墓から出土する晋式帯金具の線彫りにについてもすべて蹴り彫りとみるのに対し（藤井2014：119頁）、花谷浩は三燕の馬具の中に毛彫りを用いたものがあるとする（花谷2006）。同じ遺物に対する観察結果ではないため、どちらも成立する余地はあるが、それぞれの観察結果を客観的に検証しうる証拠⁽⁵⁾は提示されていない。

なお日本の出土事例ではあるが、三燕で製作された可能性の高い（桃崎2004など）岡山県伝柵山古墳出土龍文透金具（図版6）について、報告者である土屋隆史は鑄造後に文様を彫りくずし、鍍金をした上で毛彫りによって細部文様を表現しているとみており（土屋2015：159頁）、高精細の細部写真からもそのような観察結果をおおむね追認することができる（図12）。まだ実見を果たせていないが、同じような龍文透金具は北票倉糧窖墓からも出土しており、その製作技術をうかがい知る貴重な知見といえる。三燕の金工品に蹴り彫りだけでなく毛彫りが用い



図11 新山古墳出土帯金具の毛彫り（10倍）



図12 伝柵山古墳出土龍文透金具の彫金

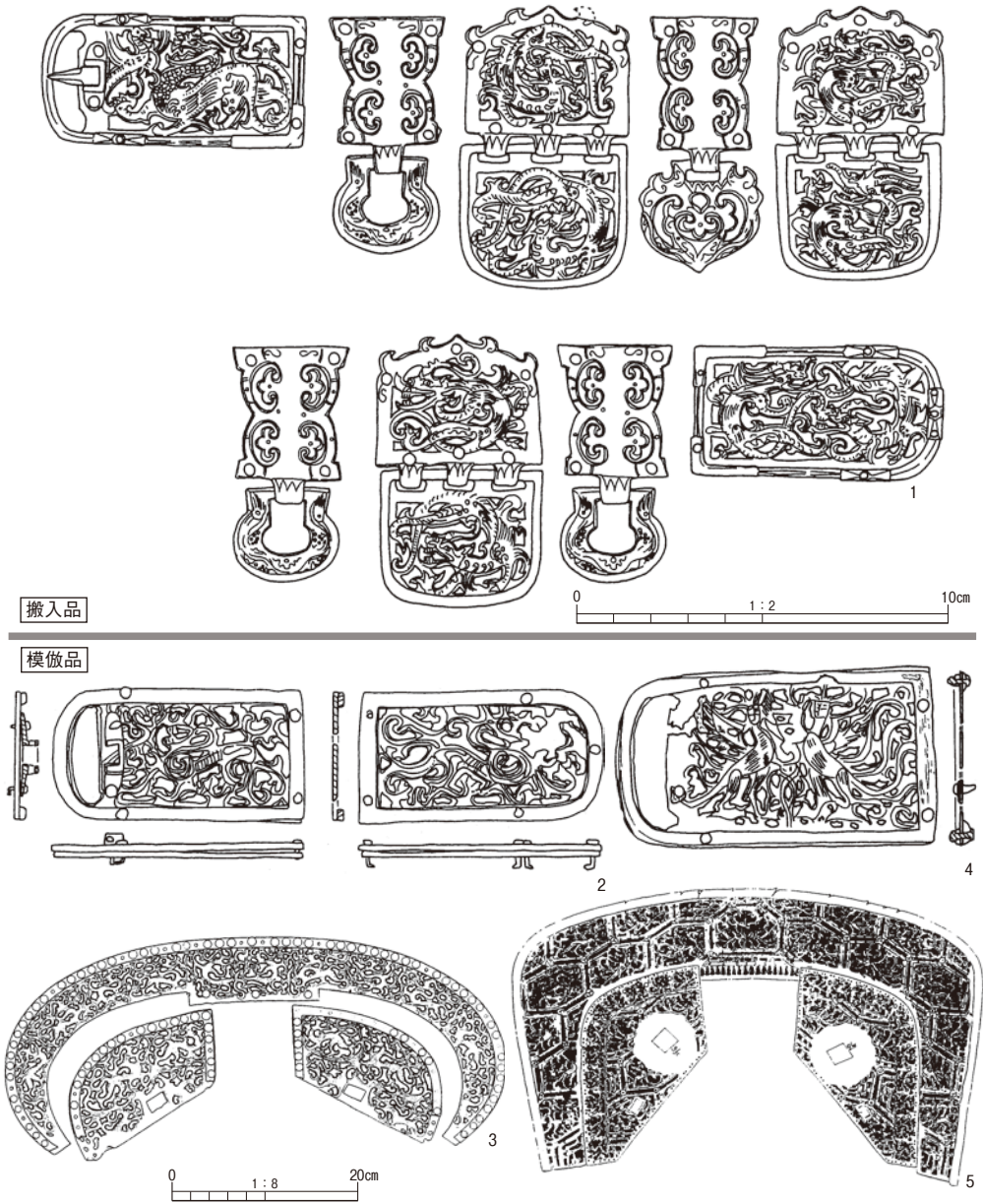


図13 三燕の晋式帯金具と鞍（帯金具：S=1/2、鞍：S=1/8）
 1：喇嘛洞ⅡM275号墓 2・3：喇嘛洞ⅡM101号墓 4・5：十二台郷磚廠88M1号墓

られていたかどうかは、東北アジアにおける金工品の技術移転を考える上で非常に重要な問題であり、個々の遺物に対する基礎的な事実を検証可能なかたちで共有する必要がある。

共通点についても日本列島の金工品生産の始まりを考える上で特に重要な点だけ指摘しておきたい。一つは「同じ文様、同じ彫金技術でつくられた服飾品と装飾馬具」の存在であり、もう一つは「鉄地金銅張」という技法の存在である。前者は直接的には人体を装飾

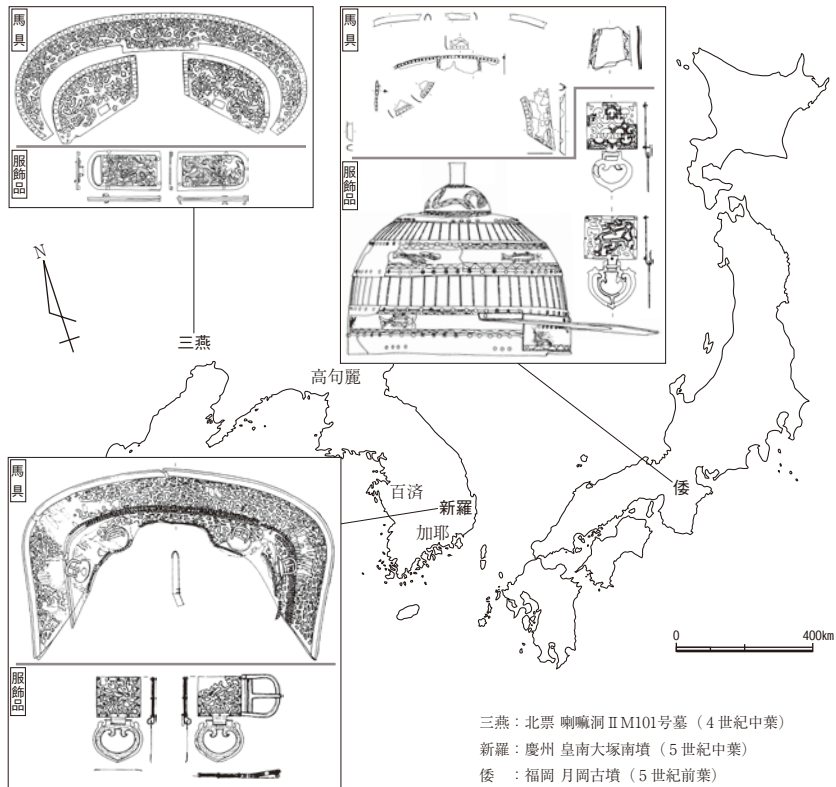


図14 東北アジア各地の着装型金工品と装飾馬具（縮尺不同）

する服飾品と飾馬につける装飾馬具が同じ意図のもと、おそらくは同じ工房で製作されたことを示唆し、ひいては両者が一体となって表象する身分秩序の存在を暗示するものである。前燕建国前後の三燕（慕容鮮卑）で現れたこのようなあり方は、少なくとも副葬品による限り、同時期の中原では確認できない。すなわち、町田章が西晋からの搬入品とみた帯金具は装飾馬具と共伴せず、三燕で模倣製作されたとみた帯金具は同じ材質、意匠、装飾技法でつくられた装飾馬具をしばしば伴うのである（町田2006、諫早2012）（図13）。

また、彼らがもともと住んでいたとされるシラムレン川の北方から大興安嶺周辺にかけての鮮卑墓からも金銀装の装飾馬具は出土しておらず（宿白1984、魏堅2004、孫危2007）、装飾馬具（及びその副葬）は鮮卑の固有の文化でもなかったようである。大谷育恵によれば三燕の服飾品は①三燕独自のもの、②六朝と共通するもの、③後漢以来の東北平原のもの、④内蒙古高原側の系譜をひくものに大別されるが、上述の帯金具は其中でも②に該当する（大谷2011）。中原（西晋）で成立し、將軍号などの中国的官位制度と関わると考えられている晋式帯金具に、騎馬遊牧民のアイデンティティたる騎乗用馬具を加えた、この胡漢融合の金工品様式を「三燕様式」とでも呼ぶならば、日本列島はその広がり末端に位置する（図14）。

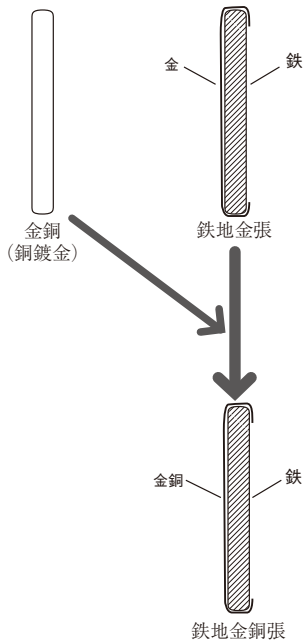


図15 鉄地金銅張技法の出現

後者は漢代に長城以北で散見される鉄地金張技法をベースとし、三燕における金銅製品の生産開始と軌を一にして出現したとみられる技法である(図15)。堅固な鉄を構造体としながら金張よりも遥かに少量の金で裝飾することができる鉄地金銅張技法は、実用性と経済性を兼ね備えた裝飾技法として、朝鮮半島や日本列島でも盛行するが、その創案地および出現時期は、桃崎祐輔が指摘するように前燕建国前後の三燕であったとみられる(桃崎2004)。

これらの共通点については日本列島の初期金工品と併行する時期の朝鮮半島にも確認できるため、ただちに三燕から倭へ直接伝わったと考えることは難しい。また、三燕ではまだ確認できない飾履や、盛行した様子のがええない裝飾大刀などの存在からみて明らかなように、朝鮮半島および日本列島のすべての金工品の系譜が三燕に求められるわけではない。さらには百済のように服飾品は卓越するもの

の裝飾馬具は盛行しない地域もあり、各地域の様相は決して一様ではない。ただ、上述の共通点が三燕の故地である中国北方はもちろん、中原でもまだ確認されていない事実は、もっと強調されてよいように思われる⁽⁶⁾。東北アジア各地の金工品の地域性は、あくまで三燕を起点とする上述の共通性を前提とするのである。

5. おわりに

本稿では筆者のこれまでの研究を紹介しつつ、倭の金工品と三燕の金工品の相違点と共通点を整理した。倭を含む東北アジア各地の金工品は、決して一括りに論じることはできない多様性をもっているが、東アジア、さらにはユーラシアを巨視的に眺めれば、「三燕様式」とでも呼ぶべき一つの金工品様式圏として設定するだけのまとまりをもっている。それは服飾品と裝飾馬具をセットでつくる点において、中原など周辺地域における金工品のあり方とははっきりと区別される。これまでに出土した考古資料による限り、三燕はその起点であり、倭はその終点である。

この三燕を起点とし、倭を終点とする技術移転の実態を明らかにするためには、出土資料から各地における初期金工品生産を復元し、比較する必要がある。本稿ではその際の重要な視点として彫金技術を取りあげた。報告書の写真や実測図からは読みとることのできない彫金技術の個性は、基本的には工人一人一人の用いる工具の違いや、作業姿勢、習慣などに起因し、製作址の明らかでない金工品の生産を議論する上で最も基礎的な単位とな

る。三燕（慕容鮮卑）墓出土金工品の徹底的な観察と記録、そして得られた知見を学界で共有する努力がこれまで以上に求められよう。すべては今後に残された課題である。

註

- (1) 本稿では倭の領域外からもたらされたものを舶載品、倭の領域内で製作されたものを国産品と呼ぶ。
- (2) 最近、刊行された報告書には「縄状に振っている」という記述と実測図（図2-2）が示されるのみで、写真は掲載されていない（遼寧省博物館2015）。
- (3) 穴沢味光（1990）や田立坤（1991）によって前燕の慕容儁が冉魏の首都鄴城を陥落させた352年、ないし鄴城に遷都した357年以降につくられた前燕墓と考えられていて、370年の前燕滅亡を下限とする安陽孝民屯154号墓出土杏葉の波状文が、典型的な波状列点文ではないことは（図9-2）、波状列点文の成立年代を考える上で一つの指標となる。
- (4) 新山古墳から出土した晋式帯金具は、今回宮内庁書陵部において栗山雅夫と調査・撮影をおこなった1886年出土品のほかに（梅原1921）、山中次郎氏旧蔵で、現在京都大学総合博物館が所有する勝形鍔が知られる（梅原1965）。
- (5) 彫金の工具痕（たがね痕）は1mmにも満たない場合が往々にしてある。客観的な証拠の提示には高倍率の写真が最も有効であろう。
- (6) 田立坤（2006）や町田章（2011）が想定するように、中原にも三燕の装飾馬具の祖形となるような装飾馬具が存在した可能性は十分考慮されるべきである。ただ、皇帝が臣下に「金梁鞍橋」を下賜するという南宋代の記事などからみて（田立坤2006）、中国社会において装飾馬具は下賜の対象となる奢侈品であったとしても、「朝服武冠」のような身分制と直結するものではなかったとみられる。

謝 辞 本稿をなすにあたって、大谷育恵氏、金宇大氏、栗山雅夫氏、鈴木勉氏、土屋隆史氏、向井佑介氏よりご教示をえた。また新山古墳出土帯金具、伝榊山古墳出土龍文透金具の調査・撮影に際しては、宮内庁書陵部の横田真吾氏に大変お世話になった。記して感謝したい。なお本稿には平成26～29年度科学研究費（若手研究B）「東北アジアにおける金工品の生産と流通に関する考古学的研究」の成果を一部含む。

引用・参考文献

- 飛鳥資料館 2009『三燕文化の考古新発見 北方騎馬民族のかがやき』。
- 東潮 1997『高句麗考古学研究』吉川弘文館。
- 穴沢味光 1990「五胡十六国の考古学・上」『古代学評論』創刊号、古代を考える会。
- 諫早直人 2005「朝鮮半島南部三国時代における轡製作技術の展開」『古文化談叢』第54集、九州古文化研究会。
- 諫早直人 2008「古代東北アジアにおける馬具の製作年代—三燕・高句麗・新羅—」『史林』第91巻第4号、史学研究会。
- 諫早直人 2012『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』、雄山閣出版。
- 諫早直人 2016「新羅における初期金工品の生産と流通」『日韓文化財論集Ⅲ』、奈良文化財研究所・韓国国立文化財研究所。
- 諫早直人・鈴木勉 2015「古墳時代の初期金銅製品生産—福岡県月岡古墳出土品を素材として—」『古文化談叢』第73集、九州古文化研究会。
- 梅原末治 1921『佐味田及新山古墳研究』、岩波書店。
- 梅原末治 1965「金銅透彫龍紋帯金具に就いて」『考古学雑誌』第50巻第4号、日本考古学会。
- 大谷育恵 2011「三燕金属製装身具の研究」『金沢大学考古学紀要』Vol.32、金沢大学人文学類考古学研究室。

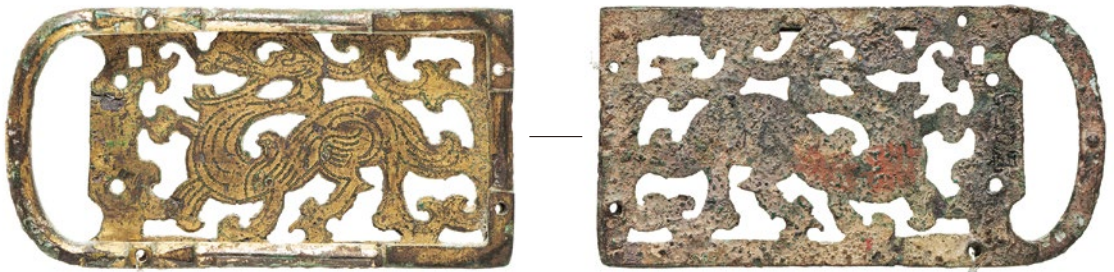
- 小野山節 1966「日本発見の初期の馬具」『考古学雑誌』第52巻第1号、日本考古学会。
- 魏堅（編）2004『内蒙古地区鮮卑墓相的発現与研究』、科学出版社。（中）
- 申敬澈 1985「古式鎧子考」『釜山大史学』第9輯、釜山大学校史学会。（韓）
- 鈴木勉 2004『ものづくりと日本文化』、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館。
- 孫危 2007『鮮卑考古学文化研究』、科学出版社。（中）
- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1983「安陽孝民屯晋墓發掘報告」『考古』1983年第6期、中国社会科学院考古研究所。（中）
- 田立坤 1991「三燕文化遺存的初步研究」『遼海文物學刊』1991年第1期、《遼海文物學刊》編集部。（中）
- 田立坤 2006「高橋鞍の復原及有关問題」『東アジア考古学論叢一日中共同研究論文集一』、奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所。（中）
- 田立坤・李智 1994「朝陽發現的三燕文化遺物及相關問題」『文物』1994年第1期、文物出版社。（中）
- 土屋隆史 2015「伝神山古墳出土の龍文透金具と鈴について」『千足古墳一第1～第4次發掘調査報告書一』、岡山市教育委員会。
- 薫高 1995「公元3至6世紀 慕容鮮卑、高句麗、朝鮮、日本馬具之比較研究」『文物』1995年第10期、文物出版社。（中）
- 奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所 2006『東アジア考古学論叢一日中共同研究論文集一』。
- 花谷浩 2006「三燕地域出土馬具について—鞍金具と轡を中心に—」『東アジア考古学論叢一日中共同研究論文集一』、奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所。
- 藤井康隆 2014『中国江南六朝の考古学的研究』、六一書房。
- 藤井康隆 2015「志段味大塚古墳の帯金具」『平成27年度「歴史の里」シンポジウム 志段味大塚古墳の副葬品の調査・研究』、名古屋市教育委員会文化財保護室。
- 町田章 2006「鮮卑の帯金具」『東アジア考古学論叢一日中共同研究論文集一』、奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所。
- 町田章 2011「前燕高橋鞍の検討」『勝部明生先生喜寿記念論文集』、勝部明生先生喜寿記念論文集刊行会。
- 桃崎祐輔 2004「倭国への騎馬文化の道—慕容鮮卑三燕・朝鮮半島三国・倭国の馬具との比較研究—」『考古学講座 講演集』（「古代の風」特別号No.2）、市民の古代研究会・関東。
- 吉井町教育委員会 2005『若宮古墳群Ⅲ 月岡古墳』。
- 遼寧省博物館 2015『北燕馮素弗墓』、文物出版社。（中）
- 遼寧省文物考古研究所 2001『三燕文物精粹』、遼寧人民出版社。（中）
- 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地一九九八年發掘報告」『考古學報』2004年第2期、考古雜誌社。（中）
- 李熙濬 1995「慶州 皇南大塚の年代」『嶺南考古学』第17号、嶺南考古学会。（韓）
- *中国語文献には（中）、韓国語文献には（韓）を末尾に付した。

挿図出典

- 図1・15：筆者作成
- 図2：遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所2004、遼寧省博物館2015をもとに作成
- 図3：諫早2008を改変
- 図7・8：諫早・鈴木2015より転載
- 図5・6：諫早・鈴木2015を改変
- 図9：田立坤・李智1994、中国社会科学院考古研究所安陽工作隊1983をもとに作成
- 図10：鈴木2004より転載
- 図11・12：宮内庁書陵部所蔵（栗山雅夫撮影）
- 図4・13・14：諫早2012より転載



1. 晋式带金具集合



2. 鉸具 (等倍)



3. 帯先金具 (等倍)

図版 1 新山古墳出土晋式带金具 1



1. 鈔1 (等倍)

2. 鈔2 (等倍)



3. 鈔3 (等倍)

4. 鈔4 (等倍)

図版2 新山古墳出土晋式帶金具2



1. 鈔5 (等倍)



2. 鈔6 (等倍)



3. 鈔7 (等倍)



4. 鈔8 (等倍)

図版3 新山古墳出土晋式帯金具3



1. 鈔9 (等倍)

2. 鈔10 (等倍)

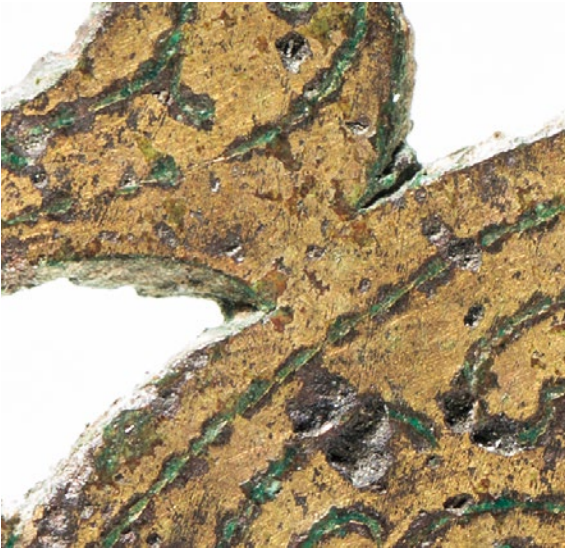


3. 鈔11 (等倍)

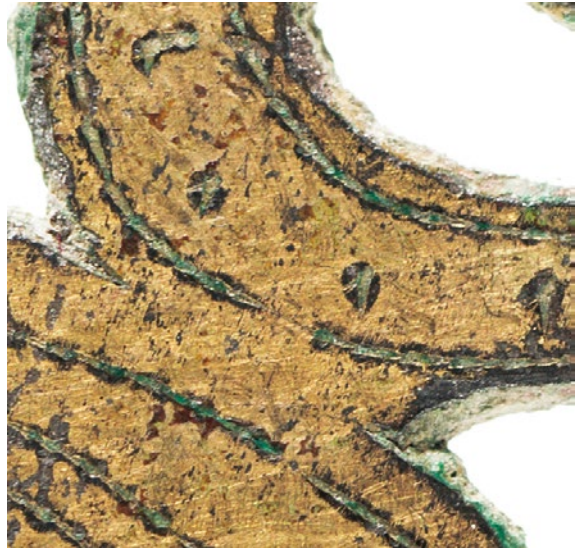


4. 鈔12 (等倍)

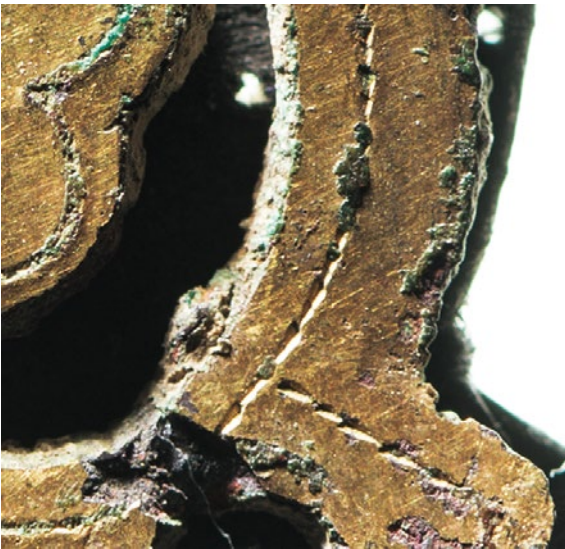
図版4 新山古墳出土晋式帯金具4



1. 鉸具 蹴彫細部 (10倍)



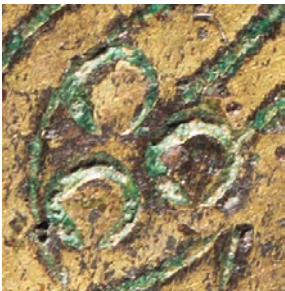
2. 帶先金具 蹴彫細部 (10倍)



3. 鍔5 (鍔板) 蹴彫細部 (10倍)



4. 鍔5 (垂飾) 毛彫細部 (10倍)



5. 鉸具 円文細部(10倍)



6. 帶先金具 円文細部(10倍)



7. 鍔5 (鍔板) 円文細部(10倍)



8. 鍔5 (垂飾) 円文細部(10倍)

図版5 新山古墳出土晋式帯金具5



1. 龍文透金具 (等倍)



2. 龍1細部 (左：頭部 右：体部)



3. 龍2細部 (左：頭部 右：体部)

図版6 伝榊山古墳出土龍文透金具